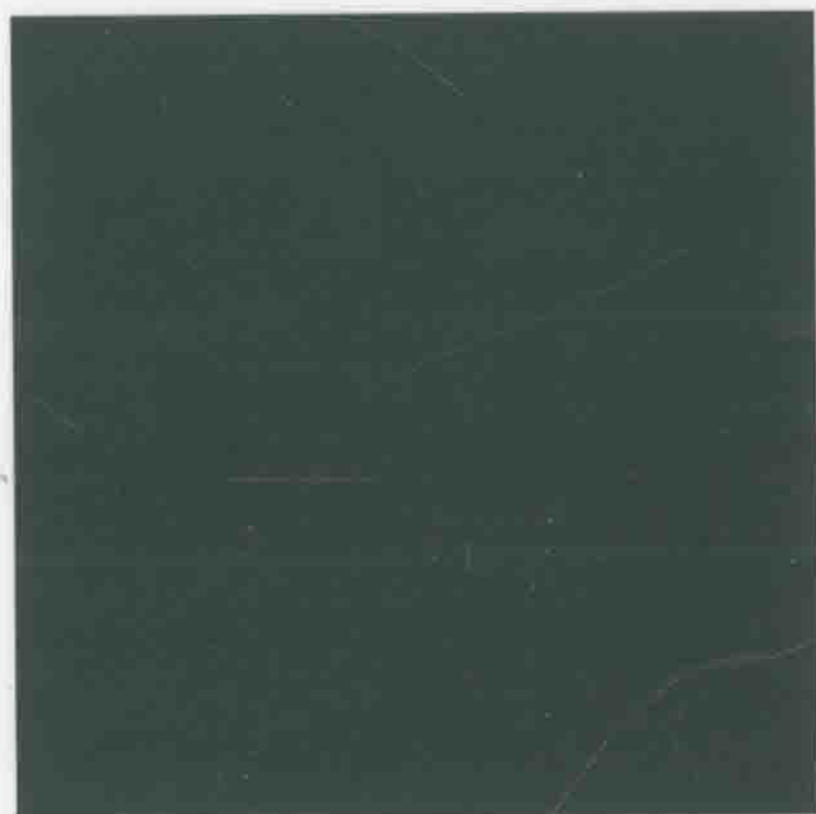


戦国誕生

中世日本が終焉するとき

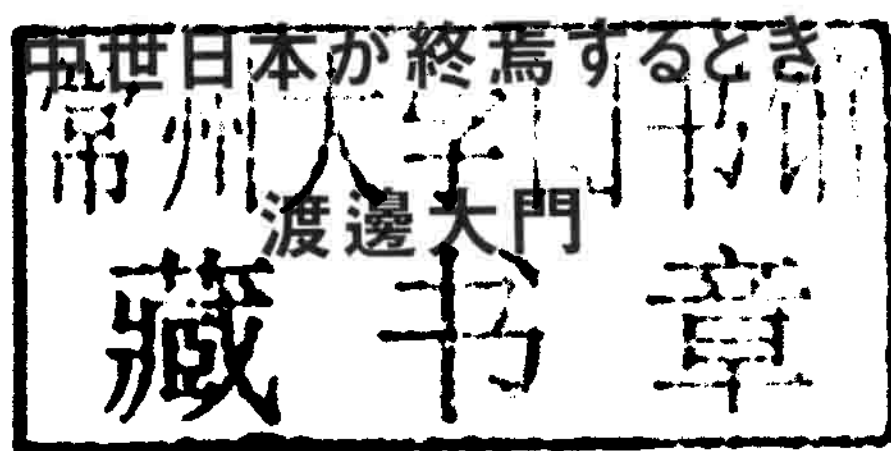
渡邊大門



講談社現代新書

2106

戦国誕生



講談社現代新書

2106

N.D.C. 210.47 275p 18cm
ISBN978-4-06-288106-7

講談社現代新書 2106

戦国誕生 中世日本が終焉するとき

二〇一一年五月二〇日第一刷発行 二〇一一年七月七日第三刷発行

著者 渡邊大門 © Daimon Watanabe 2011

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二二 郵便番号 112-8001

電話 出版部 〇三―五三九五―三五二一

販売部 〇三―五三九五―五八一七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。R(日本複写権センター委託出版物)

複写を希望される場合は、日本複写権センター(〇三―三四〇一―二三八二)にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに

3

転換期としての十五世紀半ば／「形式」から「実体」への転換期／天皇、将軍、守護の視座／本書の視座

第一章

資質なき将軍の肖像——八代将軍足利義政の誕生

13

無能な将軍の誕生／足利義教の死と将軍後継者問題／管領・政所執事の影響力／後継者と将軍の論理／足利義勝の死／後花園の期待／先例に縛られる義成／新将軍義成の人物像／悲しき現実——無力な青年将軍／功を奏した作戦／義教の嘉例にならう／飢饉への対応——問われる将軍の危機管理／他人任せの対応／資金提供の理由／将軍の資質／義政の遊興——無神経な御所造営／新邸の工事開始／高まる社会不安——一揆の勃発／戦国の様相を呈した時代／問われる政治手腕

第二章

将軍権力の行方——暗躍する守護・近臣たち

47

実際に政治を動かす人びと／「三魔」の登場／有馬氏の実像／烏丸家と将軍家／謎の女性・今参局／戦う将軍——山名氏・細川氏との暗闘／宗全の討伐命令／勝元への譴責／謀略家・伊勢

第三章

天皇の苦悩——下降する朝廷権威

貞親の登場／貞親の政所執事就任／貞親の改革断行／家督争いへの介入——謀略の家督決定／畠山義就の没落／畠山義富の復権／後継者選定の苦悩——新たな火種／関東情勢の悪化——拡大する戦線／斯波氏の内情／鎌倉公方の牽制／斯波氏と甲斐氏の関係／身勝手な人事——復活と没落と／義政の誤算／文正の政変——戦国へのプレリユード／義親の追討命令／アンシャーン・レジームの没落——守護代層の台頭／多賀氏の出自／高忠の実力／浦上則宗と赤松氏の台頭／戦国的様相の十五世紀半ば——室町的戦国の構図

天皇の実体／朝廷権威の失墜——武士の時代の天皇／皇位継承の行方——称光天皇のケース／反故になった皇位継承の約束／名前へのこだわり／突然の践祚——後花園天皇の事情／異例尽くめの践祚／政治的天皇——武器としての綸旨／持氏の前科／難題となった綸旨発給——嘉吉の乱の場合／綸旨発給のプロセス／後花園の添削／政治への強い意欲／後土御門天皇の登場——期待された天皇／後花園の引退と死——近來の聖主の限界／行幸の日々——仮住まいの天皇／室町殿の全焼／朝儀再興の悲願——一時的な朝儀再開／後土御門の情熱／天皇を辞めたい——絶望の淵で／再度の辞意表明／後土御門の怒り／改元をめぐる混乱——先例との戦い／文明改元の問題／長享改元の問題／離散する公家——窮乏の果てに／命懸けの下向——一条家領摂津国福原荘／福原荘での悲劇／冬良の福原荘下向／戦国乱世の天皇像——理念と実像と／天

皇の実像とは／朝廷権威の意味

第四章

応仁・文明の乱と分裂する幕府——本格化する戦国

147

將軍の重要性／応仁・文明の乱前夜——分裂する政治権力／義政の調停能力／足利義視の動搖——義政の気まぐれ／東軍の成立——義政と細川氏／西幕府の成立／軍勢催促と所領給与／官途の授与／義視の強い意欲／西幕府の天皇擁立／後南朝末裔の擁立／天皇候補は誰か／乱の終結——疲弊する両雄／主役の入れ替わり——継続される戦争／継続される和睦交渉／和睦交渉の長期化／偽りの和睦／止められない戦い——戦国的支配の端緒／形式だけの守護職／赤松氏の三カ国支配／実力支配の展開／分裂する將軍権力——権力の多重構造／奇妙な政権運営／日野富子の執政／親子の確執／政権委譲はあったか／「戦国的將軍観」の誕生

第五章

守護職を求める人びと——戦国的実力支配の展開

189

「形式」から「実体」へのメルクマール／変容する守護職／守護の固定化／越前国守護職の要求——朝倉氏の野望／御内書の疑念／裏工作の現場——赤松氏的事情／赤松氏が関わった事情／暗躍する浦上則宗／政則の解任／政則の復活／山名氏的事情／重臣たちの台頭／実権の掌握／斯波氏領国の解体——守護代朝倉氏の台頭／実質的な守護に／朝倉氏の死闘／斯波氏の推戴／朝倉氏の和睦／出雲国尼子氏の反逆——名門京極氏の没落／尼子氏の台頭——能義郡奉行職と

美保関代官職／尼子経久の登場／京極政経の遺言／実力支配の展開

第六章

明応の政変そして戦国へ——中世日本の解体

崩壊する室町幕府／奉公衆と奉行人との確執——奉公衆の組織／奉行人の役割／奉公衆と奉行人の参賀争い／事態の経過／布施英基の最期／六角氏討伐——義尚の政治志向／近江国への進軍／義尚の長期在陣／名前への執着／義尚の死——酒におぼれた晩年／將軍後継者問題／義政の再登場／新將軍誕生——將軍への道のり／義材の將軍就任／富子と義視・義材父子の対立／孤独な義材／政界再編と連携の模索／義材の挙兵と失敗——明応の政変／清晃の將軍就任／室町幕府の崩壊——目まぐるしく替わる將軍／細川家の内部事情／政元の横死／義材の復活と没落／分裂と統合の時代／迷走する朝廷——改元の行方／乏しい人材／多大な改元費用と進まない作業／止まった改元／後土御門天皇の最期——放置された遺骸／慢性的な財政難／政治思想の転換／山名宗全の言葉／細川政元の意見／「形式」から「実体」の時代へ

主要参考文献

おわりに

戦国誕生

中世日本が終焉するとき

渡邊大門

講談社現代新書

2106

はじめに

転換期としての十五世紀半ば

戦国時代といえば、読者の皆さんはいかなるイメージをお持ちになるでしょうか。

おそらく戦国時代とは戦いの日々であり、そこに登場する人物として、武田信玄^{たけだ しんげん}、上杉謙信^{うさぎ けんしん}、今川義元^{いまがわ よしもと}などの著名な戦国大名を思い浮かべるであろう。また、彼らの行った政治的交渉の数々や著名な合戦の経過などは、戦国時代のイメージを豊かに再現し、われわれの想像力をかきたててくれる。そして、そのなかから登場したのが織田信長^{おだ のぶなが}であり、豊臣秀吉^{ひでよし}であり、徳川家康^{とくがわ いえやす}などの天下人^{てんか びと}であつた。

ところが、戦国時代がいつ始まったのか、あるいはどのような契機によって始まったのかについては、案外わかつていようでわからないものである。そして、そのターニング・ポイントとなった十五世紀半ば頃から終わり頃にかけての政治史は複雑でもあり、意外と知られていないように感じる。

十五世紀の半ば頃といえば、どのような時代だったのであろうか。応永三十五年^{おうえい}（一四

二八）に四代將軍足利義持あしかがよしもちが亡くなつたとき、すでに後継者である五代將軍義量よしかずは夭折していた。翌年に義教よしのりが籤引くじびきにより六代將軍に選ばれたが、義教は恐怖政治を展開し、多くの人から恐れられた。嘉吉元年かきつ（一四四一）、義教は恨みを持った播磨国守護赤松満祐あかまつみつすけによつて暗殺される。

その後も混乱はつづく。三種神器のうちの神璽しんじ争奪をめぐつて、禁闕きんけつの変（嘉吉三年・一四四三）、長祿ちやうろくの変（長祿元年・一四五七）が勃発した。同時に国内各地では、守護家の家督継承をめぐつて戦いがくりひろげられた。この間、本書でも述べるように、幕府・朝廷の權威は著しく失墜した。その矛盾の到達点といふべきものが、応仁・文明おうにんの乱（応仁元年・一四六七）なのである。

日本史の教科書でも触れられているように、戦国時代の萌芽期である十五世紀半ば頃から、下剋上げこくじやうと呼ばれる現象が各地で頻発した。下剋上とは、下位の立場にある者が上位にある者を打ち倒し、代わりに権力を掌握することである。そもそも下剋上という言葉自体は、旧体制側が新興勢力を非難するために用いた言葉である。少なくとも良い意味があつたのではなく、悪い意味が込められていた。一言でいうならば、体制破壊を意味するものと捉えてよいであらう。

「形式」から「実体」への転換期

戦国時代の前の時代である室町時代は、ごく大雑把に言えば、天皇と將軍を國家の頂点とし、各地の守護が地域支配を担うような体制であった（もちろん武家が優位であった）。しかし、本書でも述べる通り、当たり前のように親から子へと継承されてきた將軍職や守護職は、時代の経過とともに円滑に委譲されなくなっていった。將軍職については幕府の重臣などの意向に左右され、守護職も同じような事態に陥つたのである。やがて、そうした國家や地域支配を担う要職は、そのときの政治情勢や實力者の意向により左右されることになった。

彼らが仮にある國の守護職を拝領しても、それが必ずしも支配の實効性を保証しないこともあった。つまり、すでに当該國には有力な守護代などが、守護職の有無にかかわらず、勢力基盤を形成していたケースもあったからである。もはや守護職が形式にしか過ぎないことも、よく見られる現象であった。例えば、十五世紀後半の越前國守護は斯波氏であるが、実際には守護代朝倉氏あさくらが支配の實権を握っていた。出雲國守護の京極氏きやうごくと守護代尼子氏あまこの関係についても、ほぼ同じように考えてよいであろう。

このような現象を見るかぎり、もはや國家支配の形態は、一言でいえば「形式」から「実体」へ移ったといっても過言ではない。それは、天皇や將軍であつても同じであつた

のである。

天皇、将軍、守護の視座

いわゆる戦国時代に関しては、多くの通史も著されており、専門的な著書や論文も数多く刊行されているが、天皇、将軍、守護の連関に焦点を絞ったものは、それほど多いとはいえない。一般的に戦国時代といえば、先述のとおり華々しく戦国大名が活躍した十六世紀初頭以降の話が中心である。しかし、戦国時代はある日突然訪れたわけではなく、いくつかの段階を踏んで到来したのである。

「戦国誕生」の契機を考える場合、最も重要なことは、天皇、将軍、守護の相互連関であると思う。戦国期における天皇の研究は近年になって活況を呈してきたが、一般的にはいまだ歴史の後景に退いており、影が薄いのが現状であろう。公家はたけやまに関しても、同じことがいえると思う。守護という存在についてはどうだろう。斯波氏や畠山氏といった有力守護家の家督争いが重要視される一方、守護職の意味などはあまり問われていないように感じている。室町幕府の評価に関しても、さらに検討を要するのではないか。

戦国時代は、政治史の出来事だけでなく経済、社会、宗教や民衆の動きなど、非常に多くの豊かな内容を含んでいる。しかし、本書では、天皇、将軍、守護の相互連関に重点を

置き、いままであまり触れられてこなかった視点から、戦国時代が始まった原因などを論じてみたいと考えている。

本書の視座

本書で中心に述べるのは、いわゆる「戦国誕生」期における「形式」と「実体」そして「権威」と「権力」の問題であり、取り扱う期間は十五世紀半ば頃から終わり頃までの約五十年間である。主人公は、天皇、将軍、守護たち。特に、天皇や将軍について取り上げたトピックスは、一般にはあまり知られていない事柄も含んでいる。権威と権力は、案外混同して理解されがちだが、それらの分析を踏まえて、戦国時代の到来Ⅱ室町幕府の解体、そして中世日本の解体の様子を明らかにしたい。それは、「形式」から「実体」そして「権威」から「権力」への時代の転換点であった。

本書をご一読いただき、「戦国誕生」のきっかけとなった数々の事象を知っていただければ、著者として望外の喜びである。

目次

はじめに

3

転換期としての十五世紀半ば／「形式」から「実体」への転換期／天皇、将軍、守護の視座／本書の視座

第一章

資質なき将軍の肖像——八代将軍足利義政の誕生

13

無能な将軍の誕生／足利義教の死と将軍後継者問題／管領・政所執事の影響／後継者と将軍の論理／足利義勝の死／後花園の期待／先例に縛られる義成／新将軍義成の人物像／悲しき現実——無力な青年将軍／功を奏した作戦／義教の嘉例にならう／飢饉への対応——問われる将軍の危機管理／他人任せの対応／資金提供の理由／将軍の資質／義政の遊興——無神経な御所造営／新邸の工事開始／高まる社会不安——一揆の勃発／戦国の様相を呈した時代／問われる政治手腕

第二章

将軍権力の行方——暗躍する守護・近臣たち

47

実際に政治を動かす人びと／「三魔」の登場／有馬氏の実像／烏丸家と将軍家／謎の女性・今参局／戦う将軍——山名氏・細川氏との暗闘／宗全の討伐命令／勝元への譴責／謀略家・伊勢

貞親の登場／貞親の政所執事就任／貞親の改革断行／家督争いへの介入——謀略の家督決定／畠山義就の没落／畠山義富の復権／後継者選定の苦悩——新たな火種／関東情勢の悪化——拡大する戦線／斯波氏の内情／鎌倉公方の牽制／斯波氏と甲斐氏の関係／身勝手な人事——復活と没落と／義政の誤算／文正の政変——戦国へのプレリユード／義親の追討命令／アンシャーン・レジームの没落——守護代層の台頭／多賀氏の出自／高忠の実力／浦上則宗と赤松氏の台頭／戦国的様相の十五世紀半ば——室町的戦国の構図

第三章 天皇の苦悩——下降する朝廷権威

天皇の実体／朝廷権威の失墜——武士の時代の天皇／皇位継承の行方——称光天皇のケース／反故になった皇位継承の約束／名前へのこだわり／突然の践祚——後花園天皇の事情／異例尽くめの践祚／政治的天皇——武器としての綸旨／持氏の前科／難題となった綸旨発給——嘉吉の乱の場合／綸旨発給のプロセス／後花園の添削／政治への強い意欲／後土御門天皇の登場——期待された天皇／後花園の引退と死——近來の聖主の限界／行幸の日々——仮住まいの天皇／室町殿の全焼／朝儀再興の悲願——一時的な朝儀再開／後土御門の情熱／天皇を辞めたい——絶望の淵で／再度の辞意表明／後土御門の怒り／改元をめぐる混乱——先例との戦い／文明改元の問題／長享改元の問題／離散する公家——窮乏の果てに／命懸けの下向——一条家領摂津国福原荘／福原荘での悲劇／冬良の福原荘下向／戦国乱世の天皇像——理念と実像と／天

皇の実像とは／朝廷権威の意味

第四章

応仁・文明の乱と分裂する幕府——本格化する戦国

147

將軍の重要性／応仁・文明の乱前夜——分裂する政治権力／義政の調停能力／足利義視の動搖——義政の気まぐれ／東軍の成立——義政と細川氏／西幕府の成立／軍勢催促と所領給与／官途の授与／義視の強い意欲／西幕府の天皇擁立／後南朝末裔の擁立／天皇候補は誰か／乱の終結——疲弊する両雄／主役の入れ替わり——継続される戦争／継続される和睦交渉／和睦交渉の長期化／偽りの和睦／止められない戦い——戦国的支配の端緒／形式だけの守護職／赤松氏の三カ国支配／実力支配の展開／分裂する將軍権力——権力の多重構造／奇妙な政権運営／日野富子の執政／親子の確執／政権委譲はあったか／「戦国的將軍観」の誕生

第五章

守護職を求める人びと——戦国的実力支配の展開

189

「形式」から「実体」へのメルクマール／変容する守護職／守護の固定化／越前国守護職の要求——朝倉氏の野望／御内書の疑念／裏工作の現場——赤松氏的事情／赤松氏が関わった事情／暗躍する浦上則宗／政則の解任／政則の復活／山名氏的事情／重臣たちの台頭／実権の掌握／斯波氏領国の解体——守護代朝倉氏の台頭／実質的な守護に／朝倉氏の死闘／斯波氏の推戴／朝倉氏の和睦／出雲国尼子氏の反逆——名門京極氏の没落／尼子氏の台頭——能義郡奉行職と